

工藤久美子『どろがめ』

中山 弘正

三井炭坑のあたり、大牟田が舞台である。大正のはじめ頃、子分を沢山連れて「泥亀」と呼ばれていた、文字も読めなかった「親分」の男（本名大森亀松）が、「大親分」である「主なる神」と出会い素朴実直な基督者となる物語りである。

3部から成り、第1部は「道」、第2部は「和解」、第3部は「岩に建つ」とされる。泥亀の息子が勇吉、彼は魚屋。不幸な身の上から、この勇吉に助けを求めてその嫁となったウタ。子分たちを連れて、けんかに明け暮れる泥亀は、「すべて労する者、重荷を負う者、我に来たれ。我、汝らを休ません」との御言葉の看板を見て、入り、やがて大牟田基督教会のメンバーとなったウタ、そしてしばらくして彼女に続いた勇吉らにはじめ激怒するが、やがて「天地宇宙を造られた大親分」また「大親分の1人っ子（イエス様）」に導かれ、大正4年（1915年）に受洗する。亀松と勇吉は「魚勝」という魚屋を営んでいく。……

第3部は、日本軍国主義がとくにひどくなった太平洋戦争の突入の頃から、長老達が「神の代理者であられる天皇陛下のご命令に従う」、「殉国すなわち殉教」等と声高にいい出し、礼拝の前の宮城遥拝をするという話から始まる。どろがめ（亀松）が声をあげて笑い出す。しんからおかしそうに。

「玉田長老さん、どげんしたとか。頭がおかしゅうなったか?」「なんやて!」「そうや

ろうが。目や口がついとる神は神やなか。聖書の御神様は、存在と知恵、力、聖、義、善、真実において無限、永遠、不変の霊であられるとばい。目には見えん!」(247頁)「天皇が神やて言うとはまったくもって間違うておる。天皇は神やなか、人間たい。」

「だけん、わしらは神様だけを恐れておればよかつたい。こん地上の何者も恐れんでよか。」(248頁)

泥亀は直立不動で、第1戒、第2戒を暗唱してから言う。「たとえ尊敬いたす天皇陛下であれ、御神様以外にはなにものをも神としてはいかん。拝んではいかん。これが基督者の掟たい。」(249頁)

長老たちの会議は、この亀松の意見を否決し、あとで心配して来た牧師も小声で「東京では要職の基督者達がこぞって英霊を祭った靖国神社の前で、なんと礼拝を行なったというんです。これが今のご時世、現実なんです。……」(251頁)

「天皇陛下の写真はご真影として礼拝対象になり、『現人神』天皇に忠誠を尽くすよう教えられた教育勅語が、白い手袋をつけた教師達によってうやうやしく読み上げられていった。」(255頁)

やがて、特高が「署まで来てもらおうかい。」と「泥亀」のところにやってくる……。

『どろがめ』は戦後に88歳で、召されたという。この本は物語りではあるが、本書のウタに当る方のお証しが基礎にある。最近の明治学院の方々にも読まれた方がいい本であろう。〔燦葉出版社、2006年10月刊〕

(なかやま ひろまさ 名誉所員・名誉教授)

